



硝子管の中へ

福元早夫

え／山本文彦

異人館へ久美子を誘つたのは、單なる思いつきからではなかつた。小学校の五年生までを、長崎ですごしたといふ彼女を、異人館へ連れて行けば、彼女が、故郷を思い出してくれるかもしれない、と考えたからだつた。神戸は、どこか長崎に似ている、と久美子はいつたことがあつた。

ぼくたちは異人館の二階のテラスから、神戸の街を眺めていた。こころよい海風がそよぐ。街は太陽にかがやいて銀色に光つてゐる。港には大小さまざまな船がつながれてゐる。つなぎきれない船は海面に浮遊している。造船所のあたりは、巨大なクレーンの、鉄の林だ。

ここからの眺めは、絵のようである。動いている人々の姿が、直接見えないせいかもしれない。海も、街も、工場も、すべて静止して見える。ここに立つていると、風景画、「神戸」を眺めているような気分である。

思いがけない、強い風が吹いてきた。久美子の長い髪がおどつた。彼女はあわてておさえつけ、額に乱れた髪をかきわけた。

久美子のおでこは美しい、と思う。すじのとおつた鼻に、氣品が光つてゐる。彼女がほほえむと、頬で、えくぼが、はにかんだようにちいさく笑う。とても可愛い、

とぼくは思う。久美子をはじめて見たとき、彼女は、きっと、どこかいいところのお嬢さんなのだ、とぼくは思つてゐた。どことなく品位があり、もの静かだつた。ものを言う態度、しぐさのひとつひとつに、洗練された育ちのよさ、といえるようなものがただよつてゐるのだった。だからといって、決して彼女は、お高くとまつてゐるわけではなかつた。むしろ、その逆だつた。頭がとてもひくかつたのである。

久美子と文通をはじめてしばらくして、彼女はいいところのお嬢さんではなく、ごく普通の、ぼくとあまりかわらない、勤め人の家庭の女の子であることを知つた。

それに、彼女は、長崎の出身だつた。ぼくと同じ、九州の人間だつたのである。ぼくはとびあがつたのをおぼえている。

彼女は、ぼくと共通したものを、背後にもつてゐる、そっぽくは感じた。とりわけ、九州という、精神的な風土が、ぼくたち二人には根深くすみついてゐる。

そう考えていくと、ぼくの彼女を思う気持は、急激に接近していきはじめた。はじめのうちは美しい彼女への、淡い憧れだつた。それがいつしか色づきはじめ、文通によつて彼女を今まで以上に知りはじめる、色づいたぼくの心に火がついた。

ぼくは確信した。あの美しい久美子が、こころの中に
思い抱く異性とは、このぼくである。いや、ぜつたに、
この、ぼくでなくてはならないのだ。

また、強い風が吹いてきた。久美子はさきほどのしぐ
さをくりかえしながら、こちらをのぞきこむようにして
いつてきた。

「仕事、そんなにおもしろくないの……」

ぼくは黙った。久美子を相手に、仕事の話
などしたくなかった。楽しくて、やりがいの
ある、ましてはそれが、生きがいにつながつ
ていきそうな仕事ならいざしらず、あんな、
試験管工場の灰色の生活など、考えたくもな
かつた。

「……元気がないのね。田村君らしくないわ
よ。どうしたの」

久美子には確か弟がいたはずである。わけ
もいわず、かたくなになつてしまつた弟をな
だめすかすようないいかたで彼女はいつた。
「こないだね」

思いきつてぼくはいつた。べつに彼女の弟
のような気分にさせられてしまつたわけでは
ないけれど、なんだか急に、自分の態度が、
男らしくない、と思えてきたからだった。

「こないだ、つても、つい最近のことなんだ
けど、パートタイムで働いているおばちゃん
に、わざわざ高等学校まで卒業していく、な
んでまた、こんな工場に勤める気になつたの、
って言われたんだ。ショックだったなあ」

「それで……」

「何とこたえたの」

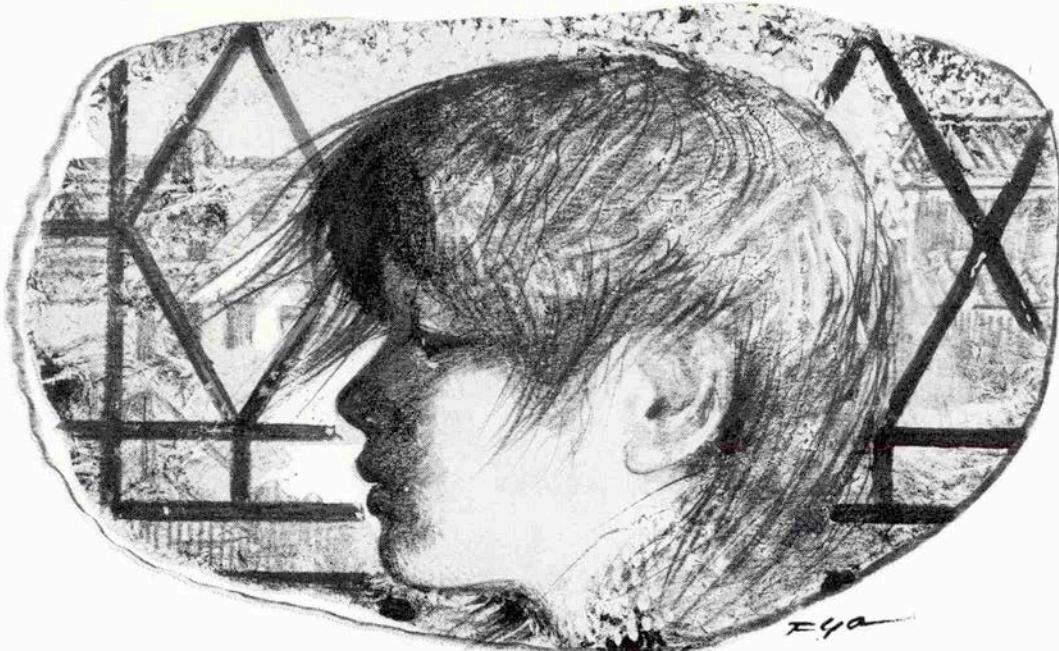
「何ともこたえることができなかつた。ショ
ックで、心臓がねじれそつた」

「オーバーね、田村君って」

「ほんとなんだ」

「どうして……」

「そのおばちゃんに問われたことは、ぼく



が、仕事をしながら、毎日毎日、自分自身に問いかけてきたことばだったから……」

久美子は黙った。神戸の街を眺めながら、口をすこしとがらせ、何か考えこんでいるふうだった。ぼくはいつたぶんにがむしを噛みつぶしたような顔をしていると思ふ。朝から晩まで、ずう一つと

「……しごと、そんなにしんどいの」

「しんどいことはないんだ。単純なんだ。試験管の半製品が、大きな容器に、いっぱいまつたら、こんどはそいつを、次の作業場へはこんでいくだけなんだ。単調で、単純で、誰にでもできる仕事なんだよ」

「仕事って、そんなもんじやない。あたしだって事務のしごとだけ、毎日同じことのくりかえしよ。つまらない、と思えばこんなつまらないしごとはない、と思えるし、ようするに心の持ちようよ」

「中島君の場合、事務のしごとだからいいよ。自分のペースでできるから。ぼくの場合、そうじやないんだ。機械にしばられ、機械にこき使われているんだよ」

「さつきもいつたけど、あたしたち、やつと社会人一年生になったところよ。まだわからないのよ。仕事のおもしろさが……」

「そうかなあ……」

「そうよ」

「ぼくね、仕上つていく試験管の半製品を、日がないちにちじいーっと見つめつけながら、これが、工業高校の機械科を卒業したばかりの、若者のする仕事なのか、と自分で自分に腹がたつてくるんだ。チャップリンじやないけど、モダン・タイムスもいいところだよ。ぼくは

機械の部分品、機械のドレイなんだよ。悲しくなるよ」「……もう、やめよう。またはじめた、っていう感じよ、田村君の悪いくせが。すぐに自分を悲劇の主人公に

するんだから」

久美子がいった。いくぶんひやかすように彼女はそういうと、きゅうに話題をかえてきた。

「旅行はしないの、ちかごろ……」

するとぼくは、すぐにそのほうにのせられてしまった。ぼくの、何よりの趣味が、旅行だったからである。久美子も、そのことを知っているのだ。

「この夏、また長崎へ行ってきた」

得意満面の笑みをつくつてぼくはいった。

「また行つたの、よくいくわね」

いかにもおどろいた、といつたふうないかたで久美子がいってきた。

「ああ、こんどで、四回目かな」

さらに得意になつてぼくはいった。

「そりやあ、いいよ。最高にいいよ」

長崎は君の故郷じゃないか、いいにきまつているよ、といいたいところだったけれど、いえなかつた。そこまでいつてしまふと、あまりにもきざすぎ、へたな口説きの文句、おんちやらにきこえそうだったからだ。

高校時代、アルバイトで得た金をためて、ぼくは毎年、夏の終りに、長崎へいった。

なぜ長崎へ行きたい、という気持がはたらいたのか。それは、久美子と出会つたことと深くかかわつてくる。

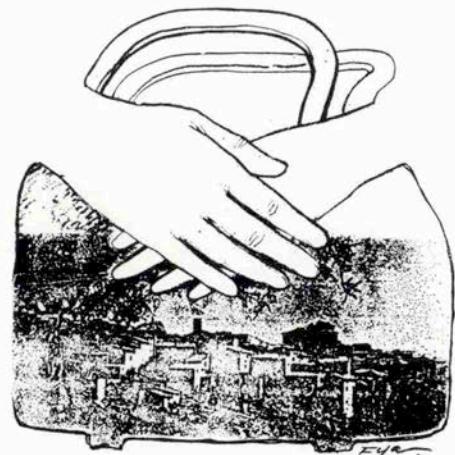
彼女から、写真入りの手紙をはじめてもらったとき、ぼくは、胸に、激しい衝撃をうけた。夏休みを、故郷の長崎で過ごしてきたという久美子の、故郷を語る手紙と写真である。彼女は長崎の街を背景に、微笑んでいた。ぼくはとてもショックだったのをおぼえている。胸を、何かに、強くしめつけられている思いだつた。

五歳のとき、両親につれられて故郷の鹿児島を去つてから、十年ちかくがたつというのに、ぼくはいちども、故郷へ帰つたことがない、まずそう考えてショックだつたのだ。

羨しい、と強く感じた。久美子は帰つていける故郷をもつてゐる。ぼくにはそれがない。ぼくたちの家族は、故郷をすててしまつたのだ。帰つていける土地がない。恋をするところのどこかには、コンプレックスがひそんでいるのであらうか。とりわけ、初恋の場合、とくにそれが強いのだろうか、とぼくは考える。

はじめのうち、久美子を思うぼくの気持は、淡いあこがれのようなものだつた。いや、正直にいつてしまえば、それとて、根源にコンプレックスがあつたのかもしれない。

久美子は勉強がよくでき、絵を上手に描くことのできる、温和は女学生だつた。そんな彼女にぼくはあこがれ、異性として意識しはじめたのだつた。もの静かで、美しい彼女は、ぼくにとって理想の女性だつたのである。久美子は、ぼくがもつてないものを、いくつかそなえもつていた。



さらに久美子は、故郷をもつていた。故郷をもつてないぼくとつて、それは、生まれてはじめて経験する激しい衝撃だつた。いつのこと、故郷の記憶など、またくななければいいのに、とぼくは考えたものだ。

だけど、五歳までぼくをつみこんでくれていたあの深い山々、住んでいた家のすぐ下を流れる川のせせらぎ、強烈な南国の太陽、高台にのぼると、はるかにのぞむ火を吐く桜島山、それらのひとつは、ぼくが忘れ去つてしまおうとすればするほどに、より鮮明にうかびあがつてきて、少年のぼくの胸をしめつけてくるのだつた。故郷へ帰りたい、いや、帰つて行ける故郷がほしい、とぼくは考えた。そうすれば、久美子とぼくは、故郷を持つてゐる、という共通の立場にたつことができるのである。たとえ、長崎と鹿児島のちがいはあつても、同じ九州の故郷である。

だがそれは、むなしい願いだつた。ぼくが故郷を思うと、なぜか、家族そろつて故郷を去つて來た日のことが、きのうのことのよう、目の前にせまつてくるのだつた。『……さあ、ここが、おいどんたちの、第二の故郷じや』父はいつたものだ。急行列車が闇の中を二〇時間ばかり走りつづけ、神戸の駅へついたときだ

つた。寒さにふるえ、兄も姉もぼくも、子供たちは歯をがちがち鳴らしていたと思う。

神戸の街は夜明け前だつた。父も母も肩をすぼめ、頼りなさそうな顔をしていた。目がすこしも光つていなかつたのである。

「さあ、家族みんながひとつになつて、がんばるぞ」

父はいつた。頑固になつたときの父のいいかただつた。母は白い息を吐きながらいねいに襟を合わせた。

「この神戸が、みんなの新しい故郷じや」

むりに笑顔をつくつて父がいった。母は黙つてうなづき、ぼくたち三人の子供をひきよせ、一人一人、得心させるように頭をなでまわした。

「さあ、行くぞ」

父はかけ声をかけるようになつた。ぼくたちはすがりつくようにして母をとりまき、トランクをかついた父のあとをついていった。

父は何度もぼくたちを振りかえつた。振りかえりながら父は、何度も同じ笑いをくり返した。母をふくめて、ぼくたちを安心させるような、前途に希望をもたせるよう、そんな笑いだつた。母だけがそんな父に笑い返していた。ぼくたちは初めて足を踏み入れた見知らぬ土地に、笑うゆとりなどなかつた。

久美子への恋心、というよりも、理想的な異性として久美子へのあこがれ、それは同時に、写真で、久美子の背景をつくつていた長崎の街への憧れとかなつた。不思議だつた。長崎が久美子の故郷である、ということを知つてしまふと、故郷をもつてないぼくは、久美子の故郷、長崎に強くあこがれはじめ、久美子のことと同じくらい、長崎のことを知りたい、と思いはじめたのである。だからぼくは、アルバイトで得た金を貯め、長崎へ足をはこんだのだった。

恋をさらに発展させるためには、何か共有できるものがなくてはならない、とぼくは無意識のうちに考えたのにちがいない。だからぼくは、年ごとに長崎へ行つた。ぼくのところの中で、長崎は、久美子そのものだったのだ。久美子を占有したい、そのためには、彼女と、長崎を共有しなければならない。

「……長崎つて、そんなにいいのかなあ」

造船所のあたりを眺めながら、久美子は一人ごとのようについた。

「いいよ。何回行つたって新鮮だよ」

「そうだよ。ぼく、また行くよ」

「あなたの故郷は鹿児島だったわね
ふいに彼女が訊いてきた。

「いいところでしようね、きっと」

「瞬、ぼくは喉に息がつまつた。

高校三年生のときだつた。長崎へ行つたついでに、ぼくは鹿児島まで足をのばしたことがある。父や母にも、兄や姉たちにも内緒だつた。我が家では「故郷」にふれながらなかつたからだ。

鹿児島本線に乗つて西鹿児島駅へ行き、そこで、日豊本線にのりかえるのだった。汽車は桜島を遠まくようなくたちで錦江湾沿いを走りつづけた。ぼくは父や母と同じ言葉のアクセントをもつ故郷の人々を親しみをこめて眺めつづけ、故郷の風景にしがみついた。

西鹿児島から五番目の駅で汽車を降り、そこから国鉄バスにのると、終点がぼくの生家だつた。バスは深い山の中を曲りくねつて走りつづけた。ぼくは揺れた。生家が近づくにつれ、ぼくの心は激しく揺れ、目を開けていられなかつた。

故郷を、ぼくはあまりにも美化しすぎていたのにちがいない。故郷に恋をしていたのかかもしれない。それも、片恋いを……。

ぼくの生家は跡形もなく取り壊わされており、雑草がおいしげつて、背を高くのばしていた。その前でぼくは涙ぐみ、うなだれた。故郷へなど、やつて來るのではなかつた……。

「……あたしね、ちかちか、故郷へ帰つて行つてしまつかもしれないの」

久美子がいつた。突然だつた。

「えつ……」

ぼくはまた、喉に息をつめた。

(つづく)



陶芸 古川軒

三宮センター街1丁目浜側
(ニューセンタービル)

電話 (078) 331-2813



芦屋神社で 写真 / 米田定藏



洋菓子と喫茶

モンルー

芦屋本店 / 芦屋市光公町 9-7 (阪神芦屋駅前)

TEL (0797)31-1781

岡本店 / 神戸市東灘区岡本 1-10-16 (阪急岡本駅西100米 第2アカギビル) TEL (078)451-8891

生 活

△第十一回▽

吉峰 正人
絵・榎忠

78 Chūōnoki



部屋……家中で人が住むように区切ったところ、仕切られた空間。ぼくのいるここはまさしくそのものである。柱によつて区切られ、ロープによつて仕切られ。これ以上の確かな部屋が他にあるだらうか。それが自分の家だったのかと探し迷うこともない。帰る道を気にしながらわざわざ出かけて行くこともない。用があれば相手からやつてくる。食事を運び、小便までさせてくれる。

今に特別仕立てのワギナを持っててくれるだらう。それにベニスをくつつけただけで、ぼくはたちまちオルガズムを感じるようになるのかも知れない。
もしかしたら、ここは今までにくま最高に居心地のいい部屋ではないのか。それが証拠に、どこに何があるのか、ぼくはすっかり覚えてしまつたではないか。タンスにはぼくの体にピッタリのパンツやパジャマが整理され

ているし、それをつけたぼくの姿が鏡にはっきりと映しだされている。

「パサパサだった髪がきれいに頭のてっぺんで丸められ、唇を這っていた無数の小さな虫が紅に隠されてしまう。色とりどりになつた顔を近づけながら、

「こんな髪型が好きだつたわ、あなたは」と女は話しかけてくる。できるだけ女や子供を見ないでいようと思うが、どういうわけか、この部屋にあってはどこを向いても子供がいて女がいる。

「私はこういう髪型はあまり好きではなかつた。でもこうしていられない、おれの嫁さんみたいじやないと怒つて口もきいてくれないんだもの。どう、似合うでしよう。

最近では私自身気に入つているのよ。あなたに言われるまで気がつかなかつたけど、こんな髪が私にはピッタリね。自分のことなんてなかなかわからぬものね」女はしきりと髪を撫であげる。鏡はぼくと一緒に、そんな女の姿も明確に映している。

髪の束ね方、その結び具合い、なかなか似合つていい。そして女が言うように、確かにぼくはそんな髪型が好きである。何故彼女はぼくの好みを知つてゐるのか。

たいていの男は長い髪を造作なくアップにした女性を好もししく思うものであると、そんな男性の心理を読んだまでのことか。偶然か。それにしてはできすぎている。ぼくにとって、それを妻だと思う一つの要因に、髪型は確かに含まれてゐるのである。

いつだつたか、妻が髪を短く切つたことがある。その時、ぼくは無性に腹がたち、顔を見るのもいやだった。口もきかなかつた。なんだか違う人といふようでは喋れなかつたのである。一緒にいてもなんとなく落ちつかない。ぼくの知つてゐるあいつはずつと長髪であった。その長さに安心していた。その方が妻だと感じやすいのである。今までショートカットでボイッシュな感じでいたものが、ある日突然、腰まで髪が伸び、それを振り乱して出迎えにきたら、おそらく誰だつて、部屋をまちが

えたのかと驚くにちがいない。きっと。

女の視線を避け、ふと見つめたところに彼女の膝がある。やや短めのスカートからはみ出た部分。そこから足の先まで、何かの粉をまぶしたように白い。つるつるとした肌。指をもつていくだけで、その表皮がペロリとめくれてきそうである。蒼い糸状の血管がそのところどころに見える。血は徐々に浮きあがつてくるようだ。案の定、蒼い糸は肌の上に這いつかがつてきて、ゆるやかに流れはじめる。わずかづつ色を濃くし、位置を変え。それは女のものでなく、脚に住みついた別の生き物のよう見える。

ぼくは寝床の中から、朝の用意をはじめた妻の、脚の裏側にへばりついているその蒼い生き物を見るのが好きだった。カーテンを越して射し込んでくる光の加減や、妻のちよつとした体の動かし方によつて、その色や位置や流れ具合が微妙に変化する。愛しあつたあくる朝などはそれがことさら美しく見えてくる。もうそのままをそこから動かさず、誰にも触れさせず、「流れ」と表題をつけて、ガラス細工の中に模様としてそれをはめ込んでおきたいほどである。

妻を抱く時、ぼくは好んで膝のまわりのその蒼い生き物をいじり、愛したものである。それに触ると、ひやあと嬌声をあげて体をよじる妻を可愛いと思つたものだ。あいつの体のどこにホクロや傷があり、へソや尻の形がどうだつたのか、知らない。どのあたりに愛の城があり、そこへどのようにしてぼくを迎えるのか、よく覚えていない。しかし、膝のまわりのその生き物だけは、ぼくの記憶の回路にきつちりと収まつてゐる。

女の膝に唇をあて、吸うと、ひやあと言つて体をのけぞらせるだろうか。ひき締まつた肉の中から、一本、また一本、浮きあがつてくる蒼い流れの筋。昨夜愛しあつたわけではないのに、それは美しく、ぼくを魅了する。三歳の女の子を犯す少年のように慄え、それは強く流れることをやめない。その流れを誇り、見せつけるかのよ

うに、女は素足である。蒼く透き通った女のそれを、ぼくは思いきり吸いあげてみたいと思った。

今日で何日目だろう？ここにこうしているのは。

誰かが戸を叩いている。うなだれていた顔をあげ、ふ

と、ぼくは息つく。あきらめるのはまだ早い。一人暮らしの老人の死だつて、いつかは発見されているではないか。ぼくはまだ死んではない。吐く息も白ければ、出る小便だつて臭いつきである。隠し通せるものではない。戸の向こうには何億の人がいる。その人たちの誰とも関わらずにいることは不可能である。何故そんなことに気がつかなかつたのか。生活とは、この世の中で生きつづけて活動することではないか。ぼくは体を乗りだす。まさか応待に出ないつもりではないだろう。誰だつて、ぼくのこの姿を見れば異常を感じるにちがいない。ぼくはたちまち近所の人に発見されるだろう。盛んに戸を叩く音。

「ちづるちゃん！」女は奥の炊事場から声をかける。ちづるちゃんか？ それにも聞きなれない名前である。どこかの飲み屋の看板にそんな名を見たような気がするが、よく思いだせない。

戸を少し開く。白い光の筋が揺れながらぼくの足元まで射し込んでくる。外はよく晴れているようだ。首を傾げ、戸の隙間から、ちらつと外をのぞいたちづるちゃんは、走つて母親のところまで行き、腰にしがみつく。背中を丸めて小さくなつた女の耳元で何かをささやいてい

る。

妻かもしれないとぼくは思う。いや、彼女でなくともいいと考へる。この際、誰でもいい。この部屋に入つてきて、ぼくを見つけてくれさえすればそれでいい。まあ、奥さん、なんてことをするんです」言いながらその人はロープを解くだらう。あら、大変、どうしましょう。警察に駆け込むかもしれない。どちらでもいい。さあ、入つてこい。早く助けにこい。

「いいわよ」女が言う。何がいいのか？ 妻と争つて、ぼくをとりあおうというのか。ちづるちゃんはふたたび走つて戸のところに行き、今度は勢いよく開ける。光が東になって眼に突き刺つてくる。その眩しさを上瞼で避ける。

「その代わり、あまり騒いではだめよ。静かに遊ぶのよ」ちづるちゃんを入れて女三人男二人。五人の子供はしばらく戸口に立つたままぼくを見つめている。髪をリボンで結んだ子がちづるちゃんに耳うちする。しながらぼくを横眼で見る。ちづるちゃんはうなずく。リボンの子は肩をすくめ、口に小さな手をあててケッと笑う。

「さあ、入りましょう」とませた口調で一番背の高い女の子が言う。戸が閉められる。入口のところに五人は車座になつて坐る。もうぼくを見ようともしない。

近所の子供らしい。遊びにきたようだ。それでも女は大した度胸をしている。相手は子供だとしても、それをこの部屋に入れたらどういうことになるか、わからぬことはないだろう。いつまでも隠しておくことはできないと悟り、徐々に外の者に馴れさせようという作戦か。しかし、どこまでいっても眞実は一つ、その人間は一人なのである。犬や猫のように、そんなに簡単に育て飼うことはできない。

五人はそれぞれ持つてきたおもちゃや本を真中にしで、遊びはじめる。しばらく耳を傾けていると、どうやら五人は一つの家族であり、誰がお父さん役をやるか、誰が子供になるかでもめている。結局、男では強そうな方が父親の役をとり、母親は背の高い女の子に決まつた。

「ちょっと間したら変わつてね」とリボンの子が言つた。

「ああ、こんなものは順番でするんだ。誰がなつてもいいんだ。お父さんが終わつたら、今度はおまえの子供になつてやるよ」と父親役の子が言う。

ぼくも順番でこうなつたのだろうか。誰がどの役をやつても、それなりに暮らしていけるのか。いや、これは

子供の遊びではない。ぼくはそれ以上黙つていられなくなり、

「ねえ、君たち！」と呼びかける。それぞれ勝手に喋つていたような話し声がピタリと止まる。一斉に振り向く。喋ろうとして、ぼくは口ごもる。何と言えばいいのか？この状態をどのように説明すればいいのか。考えているヒマなどない。

「おじさんを助けてくれないかなあ。悪い人につかまつてしまつてねえ。ほら、これを見てごらん。痛い痛い。

お願いだから、皆でおじさんを逃がしておくれよ」四人がちづるちゃんを見る。彼女は肩をすくめる。先程リボンの子がしたように。それには同じような意味があるらしい。言葉にしたらどういうことなのか。皆が真似る。

「オー、ノオー」とでも言いたいのか。それがすむと今度は口に手をあて、含み笑いをはじめる。一人がケツと

声を出す。また一人が同じように笑う。皆がケツと言う。いつの間にか大きな笑いになつていて。ぼくの思いは通じていないようである。

「ほんとうなんだ。おじさんは何も悪いことをしていいな。誰か呼んできておくれよ」声を張りあげる。

「お父さん！」リボンの子がぼくを指差して叫ぶ。

「帰ってきた。ち一ちゃんのお父さんが戻ってきた。よかつたねえ」背の高い女の子がちづるちゃんをのぞき込

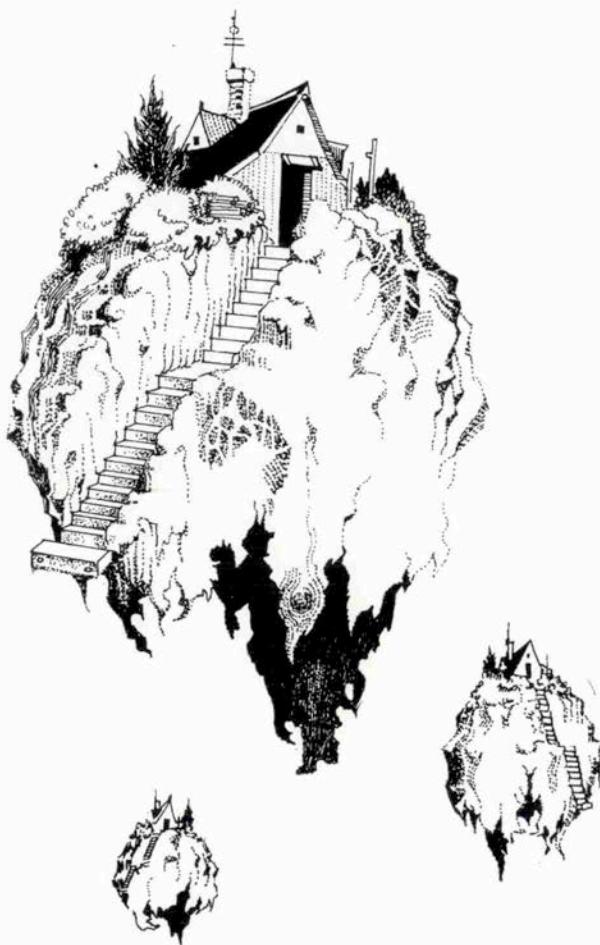
みながら言う。

「よかつたよかつた」皆が声を揃える。

いつの間にか父親役の子が縛られていた。紙紐のようなもので手と脚をぐるぐる巻きにされていた。

「あなた、ごはんにしましようか」母親役の子が言う。父親はうなずく。

「さあ、みんな、ごはんですよ」母親は紙をちぎり、三



78 Chu Snoki

人の子供に一枚づつ配る。自分も一枚とり、最後のそれを父親に向けて差し出す。彼はそれを歯でくわえ、くちゅくちゅとうまそうに食べる。

「次はおまえの番だ」言いながら父親は自分で紐をほどき、リボンの子を縛りはじめる。

ぼくは肯定されている。どうしてだろう。ぼくはその子供たちを知らない。はじめて見る顔ばかりである。それなのに子供たちはぼくを知っていると言う。こんな奇妙なことがあるだろうか？

あるかもしれない。妻が迎えにこないということをどう説明するのか。この部屋を探しめてるのは無理だとしても、夫が帰つてこないことを、誘拐されたことを、警察に知らせに行くことくらいはできるだろう。通り魔や心臓病の少女にあれだけの興味を示すマスコミのことだ、争つて書きたてるはずである。何故ぼくのことが新聞に載らないのか。女の言うように、「もうそんなもの必要ありませんわ。だって、あなたはここにこうして帰つてきているじやありませんか」なのか？ ある奇妙さを、未だに現われない妻が裏づけてしまいそうである。

ふたたび戸を叩く音。

「ごめんください」鼻にかかる女の声。妻かもしれない。いや、ぼくをここから救つてくれさえすれば誰でもいいその人を妻とするだろう。

戸は向こうから開く。四十歳前の肥つた女。回覧板のようなものを戸口から差し出しながら、「読んだらお隣へ回しておいてください」と鼻声で喋り辛らそうに言う。

「いつもごくろうさま」女は駆け寄る。女の背中越しに、肥つた女の丸い視線が見える。ぼくを見ている。眼が合うと気まり悪そうに避ける。これは怪しいと思いつながら、

「奥さん！」とぼくは呼びかける。視線が戻つてくる。それを睨みつけながら、

「奥さん、こんなところにこんな男がいるなんて、しか

も縛られているなんて、おかしいと思いませんか？ 誘拐されたんです。監禁されているのです。助けてください。お願いです。警察を呼んできてください」一気に喋る。ぼくの言葉に子供たちの騒ぎ声がやんやく。女は回覧板を受けてと振り返り、わずかに眉をしかめてぼくを見る。

「気苦労ですね。いつまでも。だけど、いいじやありませんか、帰つてきてくれただけでも」鼻声は女の顔色をうかがいながら喋る。

「ええ、何かと御迷惑をおかけすると思いますが、よろしくお願ひします」女は丁寧に頭を下げながら言う。

「いいえ、そんなこと気になさらずに。お互ひですもの。しあわせになるためには助けあわなければ」

「ありがとうございます。私にとつてもこれが最後のチャンスです」

「ほんとうによく辛抱なさいましたわ。何かお手伝いすることがありましたら遠慮なく言つてください」

これ以上黙つて二人の会話を聞いていたとわけがわからなくなつてくる。間に割つて入るように、

「待つてくれ！ こいつは妻ではない。いや、ぼくは夫ではない。奥さん、それくらいのことはあなただけて知つていいでしよう。お願いしますよ。隠さずほんとうのことを言つてください。教えてください」こうなつたら哀願するしか方法はない。だが、

「御主人さん、さしあがましいことを言うようですが、あまり奥さんを困らせないで」と鼻声は眼の縁に涙をためて言う。

「奥さん、いい加減にしてくださいよ。困つているのはぼくの方なんです。それに、ぼくはあなたのことだつて全然知らない。会つたこともないでしよう」

「いいえ、私はよく存じていますわ。しばらくここを留守にされるまでは、ほら、いつもそのところであつていただじやありませんか」